
戦後日本における大型美術展の変容と制度としての「美術(芸術)」 —60年代、「国際的同時性」の文脈をめぐる一考察

山下晃平(京都市立芸術大学)

本研究では、戦後日本に誕生した大型美術展に注目し、その言説を検証する。戦後は新聞社主導による美術展が開催され、美術界の再出発に寄与したことはよく知られている。読売新聞社が一九四九年に無鑑査・自由出品の「読売アンデパンダン展」を開催し、毎日新聞社は一九五二年に選抜を伴った「日本国際美術展」、続く一九五四年にその姉妹展であり、国内の総合選抜展である「現代日本美術展」を開催した。いずれもジャーナリズム・美術評論家・作家が結集し、戦後日本において重要な批評の場を形成している。これらの大型美術展に対する研究としては、個々の批評は多くあるものの、その総体を捉える試みはまだ充分になされていない。本研究では、これら大型美術展の変遷を捉え、批評の価値基準を検証することで、美術界そのものの構造と志向性を明らかにする。

戦後日本の美術批評に関する研究では、六〇年代の「国際的同時性」について検証した富井氏の論考がまず注目される。「国際的同時性」は、主に読売アンデパンダン展で育った若手作家による、旧来の様式に依拠し得ない、当時の言葉を借りれば多様な素材を用いた「観念的な」作品の登場を指して、美術評論家が頻繁に用いた言葉だ。だが、富井氏も含めこれまでの批評は、前衛的な作家・グループに注目し、その活動を海外とのインターフェイス、主として欧米の美術動向から分析する傾向が強い。しかし一方で、戦後日本美術の研究においては、画壇の再編より始まる美術界そのものの構造を把握し、その志向性を検証する必要がある。

先に挙げた戦後の大型美術展は時代の動向に密接に関わり、変遷を余儀なくされる。その変遷と言説を検証することで、画壇から個の台頭へ、従来の絵画・彫刻からコンセプチュアルへと変化していく最中であって、美術界が孕む、画壇のヒエラルキーやジャンル・展示という近代のカテゴリーに対する保守性の問題、「現代(コンテンポラリー)」に対する意識の振幅、そして前衛における批評そのものの価値基準(欧米の価値基準と日本の独自性)の問題が見て取れる。つまり、六〇年代の「国際的同時性」の文脈には、日本において近代以降続く制度としての「美術(芸術)」受容とそこからの逸脱、あるいは日本固有の文脈の問題が内在している。それは、一九六七年の第九回「日本国際美術展」の国際審査制導入において顕在化する。

このように本研究では、まだその総体が把握されていない戦後の大型美術展を対象とすることで、当時の美術批評に孕んでいた日本という場の問題、特殊構造を明らかにする。この視点は、従来の前衛的な作家・グループに焦点を当ててきた戦後日本の美術史形成に対して、新たな視座をもたらす。同時にその射程は、六〇年代に起こる「美術館から野外へ」という美術界のもう一つの志向、即ち野外美術展の展開へもつながり、その構造的な位相の把握を可能にする。